文学と宗教

〈作品論・文学紀行〉

太宰・芥川・鷗外など

清水茂雄著

以文選書 22

教育出版センター

文学と宗教

〈作品論・文学紀行〉

太宰・芥川・鷗外など

清水茂雄著

教育出版
センター

＜著者略歴＞

清水　茂雄（しみず　しげお）

昭和10(1935)年　群馬県に生まれる。

昭和41(1966)年　慶応義塾大学大学院文学部国文学科修士課程修了

全国大学国語国文学会々員　解釈学会々員　創価高校教諭

現住所　東京都東村山市廻田町4—25—17

昭和五十八年七月十七日初版発行

以文選書22

文学と宗教

＜作品論・文学紀行＞

著者　清水　茂雄©

発行者　柴崎　芳夫

印刷所　興英文化社

発行所　㈱教育出版センター

東京都豊島区北大塚三—二九—二

郵便番号　一七〇

電話　〇三（九一七）八九三〇

振替　東京〇—一四六一二

検印省略

3091—3222—1475

乱丁・落丁本はお取替え致します。

はしがき

本書の出版に際し序文を認めてほしいという著者からの願いであったが、分に過ぎることなので、代りに感想の一端を述べたいと思う。

著者の清水茂雄氏とは、国文学の研究を通して十二年ほど前に知り合ったが、その頃、氏は既に〈文学と宗教〉のテーマについて研究の構想を練っておられた。

私も同じテーマで研究を進めていた折でもあり、氏の構想に賛同を示すとともに、研究の成果を大いに期待した。

その後、氏をはじめとして、文学と宗教に関心を抱く若手の学究者がつどい、〈文学と宗教〉研究会を設立し、上代から現代に至るまでの文学に、主として仏教の面から光を当てて、見直してきた。

氏は、おもに明治以降の文学に関心を寄せており、その研究会で口頭発表したものや、各種の紀要・研究誌などに掲載したものを、今回ひとまとめにして、本書を編まれたようである。十年来の研究の構想が実り喜びにたえない。

氏における視座のユニークな点は、いきなり正面から宗教の教義をふりかざしたりせずに、宗教の或る角度から、またその周辺から文学をとらえ、考察をしているところにあろう。

文学と地獄についての論考や、仏教の説く十界論から小説の登場人物を見つめている点など、他にあまり類のないものといえる。

一方、氏は研究対象の文学に関連ある地をよく訪れている。単に文学理論をもてあそぶのではなく、文学を環境面から直接実感するという氏の研究姿勢のあらわれであるが、それは第二章の「文学と風土」によくまとめられている。

本書は、氏における文学研究の一里塚といえよう。今後の更なる発展のためにも、本書を手にされた先学諸賢の御教導を賜ることができるならば、氏の親しき同学の一人としてこの上ない喜びである。

昭和五十八年七月

西田禎元

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

文学と宗教　目次

はしがき

第一章　文学と宗教　9

一節　太宰文学における地獄観　11
目につく言葉「地獄」12　『思ひ出』の地獄13　地獄の種々相17　「欺き」の地獄22　「欺かれる」地獄25　『走れメロス』の信頼30　地獄からの脱出32

二節　太宰文学の倫理性　35
革命は外より内36　得難い無酬精神44　道徳革命の限界53

三節　芥川文学と仏教の素材　57
仏教素材への対応58　神不信の芥川59　美学を基本の信仰物63　地獄のとらえ方67　多出する『観音経』71　自殺と『阿含経』76

四節　鷗外文学と宗教 79
仏教面より照射 80　鷗外の思想概観 81　傍観者の宗教観 84　キリスト教観 86
歴史小説の神仏 90　結実した人間像 93　鷗外の期した宗教 99

五節　鷗外文学の献身の精神 101
献身への視点 102　「まだ」ある無酬の精神 103　歴史小説へ移行の一因 107
『鎚一下』のキリスト教的献身 112　歴史小説の献身 114　『最後の一句』の自己犠牲 118　献身の普遍性 122

六節　芭蕉俳諧の宗教性 125
仏教の俳諧への係わり 126　芭蕉の剃髪と仏頂禅師 127　仏教傾斜への要因 130
参禅後の生活 134　禅宗の影響 138　仏教を風流修行に応用 143

第二章　文学と風土　147

序説　『破戒』における地名の一考察149
『破戒』の地名の有無150　「新屋（あらや）」か「荒谷」か150　田沢の峠153　西入牧場と富士神社156　実在しない「向町」160　「根津川」や「定津院」162　殆んど実在地名166

一節　武蔵野文学紀行169
万葉歌碑170　うけらが花173　太宰の住居跡175　山本有三の豪邸179　露風の遠霞荘181　鷗外遺言碑と墓185　太宰の墓の供花191　『次郎物語』第五部のモデル193　独歩と『武蔵野』195　『太平記』の古戦場跡（小手指・東村山・府中）200　立川の牧水歌碑207

二節　湘南文学紀行211
独歩の寓居跡213　逗子と蘆花216　鎌倉の万葉東歌222　稲村ヶ崎の義貞224　太宰心中の浜226　藤沢鵠沼の芥川228

三節　房総文学紀行 233
万葉「真間の里」235　『野菊の墓』の舞台 237　左千夫生家と九十九里歌碑 241
『智恵子抄』詩碑 244　古泉千樫生家 248

四節　下野・上野文学紀行 253
長塚節の生家 255　『奥の細道』の日光・裏見の滝 259　足尾鉱害と城山三郎・志賀直哉 262　童謡の父・石原和三郎 267　朔太郎と前橋 270

五節　小諸周辺の藤村文学紀行 281
藤村旧栖地 283　光岳寺や揚羽屋 286　小諸義塾跡 287　懐古園の藤村詩碑 289　中棚鉱泉と水明楼 294　上田城址 296　田沢温泉の升屋 299

あとがき　304

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

第一章　文学と宗教

一節　太宰文学における地獄観

目につく言葉「地獄」

太宰の作品にふれて気のつく一つは、同語が繰り返し使用されていることである。「死」「自殺」「酒」「含羞」「地獄」など、作品を少し読めば容易に見いだせる。小説家に好みの言葉や使用しやすい表現があるのは当然で、志賀直哉の「拘泥」や、森鷗外の「意識の閾の下」などその一例といえようが、それにしても太宰の同語使用頻度は他にくらべ一段と高いといわざるを得ないだろう。これから論じる「地獄」の語は、初期の『晩年』より生前最後の『グットバイ』までの長短編において、百余回の多くにわたって使用されている。もちろんそれらの中には、「地獄のような…」という単なる比喩や、登場人物の心の暗さをエンファサイズする意味での、ごくありふれた使用例もあるが、ここではそれらはあまり問題としないで、太宰文学においてもっと重要な意味をもつ地獄について考察をすすめる予定である。元来、「地獄」なる語は、近代以後の文学において比較的目につきやすいものであったといえるかも知れないが、ただ太宰の場合、自伝的小説といわれる『東京八景』や『人間失格』などに多用されており、しかもそれらが太宰文学固有の意味内容をもち、他にあまり類をみない独特の地獄の様相を創出している点に大きな特色がある。いまだ研究が十分にいきとどいていない太宰文学の地獄の問題を、主として作品に書き表わされている「地獄」の語を手がかりに究明してみたいと思う。

『思ひ出』の地獄

地獄の問題を考察するにあたっては、太宰の出世作であり、傑作五指にも数えられる、抒情的な青春文学『思ひ出』の中の左の一節を見おとしてはなるまい。青森県屈指の大地主津島家の四男として成長した太宰は、生母が病弱だったこともあって、すぐ乳母にいだかれ、一年足らずで叔母の手にゆだねられたが、さらに三歳のとき、子守たけの手にわたって、小学校へ行くまで彼女に面倒をみてもらうことになる。政治家として多忙で留守がちな父にはあまり親しさを覚えられず、母の慈愛からは遠ざけられて育った太宰にとって、たけの存在はいやが上にも大きな比重をしめることになったのである。『思い出』の中のたけは幼い太宰の教育に熱心で、本を読むことを教え、道徳の指導もした。お寺へ行って、子供心に大変恐ろしく感じる地獄極楽の絵掛地を見せもしてくれたのである。

お寺へ屢々連れて行って、地獄極楽の御絵掛地を見せて説明した。火を放けた人は赤い火のめらめら燃えてる篭を背負はされ、めかけ持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながってゐた。血の池や、針の山や、無間奈落といふ白い煙のたちこめた底知れぬ深い穴や、倒るところで、蒼白く痩せたひとたちが口を小さくあけて泣き叫んでゐた。嘘をつけ

ば地獄へ行ってこのやうに鬼のために舌を抜かれるのだ、と聞かされたときには恐ろしくて泣き出した。

そのお寺の裏には小高い墓地になってゐて、山吹かなにかの生垣に沿うてたくさんの卒堵婆が林のやうに立ってゐた。卒堵婆には、満月ほどの大きさで車のやうな黒い鉄の輪のついているのがあって、その輪をからから廻して、やがて、そのまま止ってじっと動かないならその廻した人は極楽へ行き、一見とまりそうになってから、又からんと逆に廻れば地獄へ落ちる、とたけは言った。たけが廻すと、いい音をたててひとしきり廻って、かならずひっそりと止るのだけれど、私が廻すと後戻りすることがたまたまあるのだ。秋のころと記憶するが私がひとりでお寺へ行ってその金輪のどれを廻してみても皆言い合せたやうにからんからんと逆廻りした日があったのである。

右の文中三箇所を特に問題としたい。

まず、「めかけ持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながってゐた」の言葉であるが、太宰はすでにその一例として『無間奈落』の大村周太郎のことを書いている。生涯にはいくつかの作品で不貞な男女の姿を描くが、注意したいのは嘘と不貞とが重なり合って地獄の世界をつくってゆく、という設定が目だつことである。くわしくは後に述べるが、その意味でめかけ云々は軽視できないのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c